
不死の島

天とぶ羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死の島

【Nコード】

N0610D

【作者名】

天とぶ羽

【あらすじ】

ーこれは神からの手紙である。『×××××サマ。○○ガツ△△ニチ、XX市◇◇町123ー4。アナタノバンドス。望ミガ叶イマス』※微ホラーです。あまり怖くない仕様です。

プロローグ―その島―

地球という星の日本という国の何処かの県の何処かにある島。

これはその島を取り巻くお話。

貴女のもとにただの黒いだけの封筒が届いたら

それは島への招待状かもしれない：

1・4月【上旬】

4月。

春なんて来ないんじゃないかと思うほどの寒さに思わず身を震わせた月の初め。いつもより増して霧が濃く、視界は零。全く周りが見えなかった。

木で作られた古い家は、中に入れば暖かく僕を迎えてくれる。

今年こそは命に関わることになるかと戦々恐々として迎えたエイプリルフルを無事に終え、拍子抜けしつつ出しっぱなしのコタツから窓を見ながら「もうそろそろか」と思っていると案の定、コンコン、と控えめな音が響いた。

「すみません、どなたか、いらっしゃいませんか？」

その声は少し困惑したようだった。高めの、女性の声。

「はい」

しぶしぶ暖かい天国から出て、戸を開ける。木製で引き戸だから開けにくいことこの上ない。

「何か御用でしょうか？」

思ったとおりの女性。しかし、彼女はきょとんとしていた。

「：あの、ここ、本当に――」

「黒い封筒を受け取られた方ですね？」

彼女は驚いて僕を見ていた。

「なんで―」

「では、お入りください。ご説明いたしましょう」

僕はにっこりと笑って、彼女―あおはら青原 まいこ舞子を迎え入れた。

「寒かったですしょう？ どうぞ、コタツにお入りください」

僕は頼まれたとおりにアメリカンコーヒーを入れた。知人に淹れ方を教わっておいて本当に良かった。

「あの、こういうことなんでしょう？ 失礼ですが、君みたいな子どもがこんなところで、しかも封筒のこと…」

彼女は警戒…というよりは、疑うように僕を睨んでいる。

僕はにっこりと笑いかけながら、コーヒーとお茶を運ぶ。

「驚かれるのはもつともだと思います」

コタツの上に、お茶とコーヒー。コーヒーカップはお店で使っているようなものだから不釣り合いもいいところだ。

「けれど、僕のことよりも封筒のことを話さなければなりません。僕の説明中、一切口を挟まないことを約束してください。話は、それからです」

「…わかりました」

少々頷いたのを確認してから、一呼吸おいて話し始める。

およそ一千年の昔。

―この国の何処かにある海域。地図にも航海図にも載っていないその海域は、しかし確かにそこに存在している。年中霧に包まれ、その海域は危険地帯として知られている。暗礁が多く、海流も早い上に渦を巻いている。普通の船では、行くことはおろか、通り抜けることさえできない。そしてその海域の中央には島がある。知っている者は少ない。ほとんどの冒険者達は、海域に何があるのかを知りたいらしいのだが、島を訪れようとする者達は例外なくその霧に包まれた瞬間に命を落としている。けれど彼らは挑戦をやめようとはしない。

そうまでして島を目指す理由、それが。

―島の神殿に行けば、自らの時間と引き換えに、願いと永遠の命が手に入る―

勇敢な者たちは無謀なことに、何も持たずにその海域に踏み込む。それが、島の神を怒らせているとも知らずに。

僕が話し終えた後、僕は彼女をしてみる。呆れたような顔をしていて、如何でもよさそうに見える。彼女、どうやら僕をかなり疑っているみたいだ。

…っていか本当に一切口を挟まなかった。この人疑い深いくせに素直というか、単純というか、何と言うか。

「…そのお話と、この状況と、どう関係があるのでしょうか」

なんだか当たり前の反応をされてしまった。まあ、そりゃそうだろうな…わけのわからない方からすると、わけのわからない話だろうから。

「ええまあ、それはそうですよね」

「一千年も昔の話ではなく、今の話が聞きたいのですが」

「一千年前の話じゃなかったとしたら？」

「…はい？」

僕はため息を吐く。一千年前の事だったら、僕だって苦労してない。

「今もその島が実在するとしたら、どうです？」

「実在…といえますと」

彼女は胡散臭そうに僕を睨む。

「言葉通りですよ、実在するんです。そして」

一旦言葉を区切って、言う。

「本来なら見ることにすら出来ないその島に行くためには、その黒い封筒…僕は『護符』と呼んでいます…それが必要なんです」

「あの…1つ質問なのですが」

「はい、どうぞ？」僕は頷く。

「どうして貴方はそこまで知っているのですか？…その、島のこと」

何度も説明していると飽きてくるんだよな、いい加減。それが、僕の仕事だとしても。

「僕は島の神に許された、唯一の案内人なんです」

大げさに言ったつもりは微塵もなかったのだけれど、彼女はくすりと馬鹿にしたように笑った。

「貴方が、ですか？」

笑い混じりにそういう。

「ええ、まあ」

僕はうんざりしながら、それでも表に出さない。

「この話にまつわる人たちになら、結構有名なんですけどね」

彼女は笑いを止めた。

「この髪に」僕は深くかぶっていた帽子を取り「瞳の色」レンズの上から瞳を指し、名乗った「」

「…それ、」

「今は、司会者の『司』で、つかさって名前ですけれどね」

今の様子を見る限り、彼女は僕の特徴を知っていたみたいだ。つまり僕を探していた中の1人なのだろう。そうでなければ、こんなところまで1人で来るはずがない。

「やっと…」

そうつぶやいた声を、僕は聞き逃さなかった。

それからしばらく他愛もない世間話をした。無愛想もここまでくるといっそ清々しいと思った。

彼女の年齢は29才。そうは見えないといったら、童顔である事を気にしていると言っていた（ちなみに僕は、23才くらいだと思っていた）。仕事は会社員だと言う。役職は教えてはくれなかったので推測だけれど、僕は秘書をしていると思う。持っていた鞆の中が見えたときに分厚い手帳のページが見えて『社長の予定』と書いてあったからだ―まあ、それだけでは断定できないよな、うん―そして、彼氏は募集中だとか。このあたり要らない情報だった。

「…あの、もう帰らないと…」

「ん、ああ、そうですね」

僕は立ち上がって、最初の大仕事に取り掛かる。

「では、契約をしましょう」

「…契約？」

彼女はきょんとする。…やっぱり、30前には見えない。

「今日は島にお連れすることは出来ません。貴女にも都合があるでしょうから、日を改めることにしています」

「ああ、そうですね」

少し残念そうに見える。

「都合がいい日はいつですか？」

少々お待ちください、と言って手帳をめくる。手つきがスムーズだ。やっぱり、この人秘書だな。

「そうですね、来週の土曜がいいです」

「では、その日に必ずお越しください。11時に出発ということで、その時間を過ぎるとお連れすることは出来ません。形式上必要なものなのですが、ここに契約書があるのでお読みください」

陽に焼けてボロくなった紙を手渡す。僕が手で書いた契約書。少し、薄くて読みにくい。

契約書

島に渡るにあたり、以下の点を厳守していただきます。

守れると約束できない場合、又は、契約内容を破ってしまった場合、島には渡らず、命の保障は出来かねます。

・ 契約する者（以下あなた）はこの島に関わる一切のことを誰にも話さないこと。

（黒い封筒『護符』のこと・案内人の住む場所・島の場所・約束事など）

・ あなたは、何があっても案内人の事を一切恨まないこと。

・あなたが島に渡った後、滞在する時間は一日間（24時間）とする。

それ以上は滞在できないこと。

・あなたは24時間内に舟に戻ってくること。

・案内人は、島の中でのあなたの行動、生命、その他一切の責任を負わないこと。

ただし、案内人は島へ送る際は責任を持って行動する。

・あなたが島に持ち込めるものは、案内人が貸し出す物のみとする。

それ以外を持ち込んだ場合、案内人は持ち物への責任を一切持たないこと。

・あなたは案内人に対し、案内料として出発日に全財産の半額を現金で支払うこと。

・あなたは島から本島に帰ってきたその日に、案内人に島で体験してきたことを必ず話す。

氏名

印

「…この、現金で全財産の半額というのは…」

「僕も生活するのにお金が要るし…いろいろ、必要になるんです。」

それに最近ではここを訪れる人も少なくて…」

彼女はかなり悩んでいる。それはそうだろう。全財産の半分。彼女の場合、かなりの大金になるだろうから。

「…まあ、金額は少なくてもいいですが、その場合安全性が低くなることになります。それでよければ」

「いえ、わかりました。半額だと証明できるものは当然必要ですよね？」

「いりません。半額かどうか、それは貴女がわかっていればいいことです。島に渡る際の安全は書いてある通りに僕が責任を持ちますが、それ以降の責任は全て貴女に委ねられますので」

彼女は驚き、何度も確認した。何度言われても同じだというのに。契約書に名前を書き、印鑑がなかったらしいので朱肉を出すと親指の指紋で代用した。

玄関口。彼女は戸を開けて、振り返る。

「半額、必ず当日お渡しします」

「はい」

「では、また後日」

「またお会いしましょう」

こうして、青原 舞子は帰って行った。

僕が次に彼女に会うのは、来週の土曜日だ。

1・4月 【上旬】（後書き）

…それにしてもやっぱり30前には見えないよな。

うん、あのくらいの人めもかわいいかも…痛いつ!?

上からタライが落ちてきた…

エイプリル・フールの影響!?

2・4月 【中旬】

彼女は約束の時間の30分前に来た。

「お久しぶりです」

「はい」

僕が挨拶をすると、重そうな黒いバッグを下ろす。少し息が切れている。相当重かったんだろうな…これ。

「約束の、お金です。全財産の、半額分」

僕は中を開けることなく受け取った。

「確認しないのですか？」

「確認したところでどうなることでもないでしょう？ 本人がわかっていれば良いことですから」

それが案内人としての信用ってもんです、と付け足す。彼女は本当に驚いている。

「それに今から追求したからといって、この近くにお金を下ろせる場所もあります」

「ああ、なるほど」

ここは人里離れたところだ。人里どころか社会や世間から離れ、忘れられた場所。普段は誰も通ることはない。

「では、準備しましょうか。中でコタツにでも入っててください。

僕にはやらなければならないことがあるので」

「わかりました」

「時間になったら呼びに行きます」

ため息を吐いて彼女は小屋へ入っていった。戸を閉めたことを確認して、準備を始める。

時間になる直前に彼女を呼びに行った。彼女は目を輝かせて立ち上がる。

「手荷物はお預かりしますから置いていってください」

渋々荷物を置き、玄関を出た彼女は足を止める。

「…え？」

「どうしました？」

「…あの、山は？」

「ここは海ですよ」

「…さっきまであったのに」

これくらいで驚かれては困る。

「さあ、船を用意しました。乗ってください」

戸惑ったように頷いて、彼女は僕の用意した船を見る。

「…これで、行くんですか？」

「はい、これで行くんです」

「…転覆、しませんか？」

「はい、転覆しませんよ」

「…浸水、しませんか？」

「はい、浸水なんてとんでもない」

心配になるだろうな…僕だって、木製の手漕ぎ舟なんていつの時
代だ！と思う。

けれど、自然の恩恵で出来たものでなければ受け入れてくれない
んだから仕方ない。

「わかりました。契約もしたことですし、信用します」

「それは良かった。では、行きましょう」

時間も迫っていることだし。

漕ぎ出して数分で11時になった。

そろそろこの舟も新しいものを作らないといけないだろうか？

「視界が利かないですね」

「はい。でもあつてますよ」

「そうなんですか？」

「僕は案内人ですから」

なんとも理由になっていないけれど、仕方がない。本当なのだか
ら。

「もうそろそろですよ。前方の海面を見ててください」

「…?」

漕ぐ手を止めて、舟を安定させる。

ここで安定させないと大変なことになることは実証済みだ。

「…なに、あれ…!？」

彼女が驚くのも無理はない。前方から正体不明の光る触手のようなものが現れれば、誰でも不安を感じずにはいられないだろう。

「大丈夫ですから静かにしててください」

「大丈夫って…」

「言ったでしょう？ 島までの安全は僕が保障しますって」

「…わかり、ました」

このお嬢さん、なかなか肝が据わっているな…

光る触手はゆらりと舟の下を通る。そして船底を覆うと、その面積を広げて舟を押し上げた。

彼女は「ひっ」と小さく声をあげたものの、言ったとおりに静かにしていた。

舟に乗り込む際に貸したナップザックを抱きしめて、必死に抑えているようにも見える。

「後は勝手に連れて行ってくれますから、楽にしてください」

止まっていた船が、動き出す。

光る触手が収縮するように、やってきた方へと引いていく。僕らの乗った舟はそれに乗っかっている形で、漕がずに移動している。

僕は楽だ。

「わ、移動して…じゃ、ない、させられてる…」

まさにその通りだな。

「この調子だと正午くらいにつくことになりそうですね」

「…そんなに、ですか？」

「これでも短いほうですよ。天気が悪いともっとかかりますから」

そう。視界がほぼ零になる霧の中でも、いいほうだ。…確か五年ほど前には嵐の中、津波を越えて行った覚えがある。

「天気が悪くても行くんですか？　この舟で？」

…なんだ、この舟じゃいけないというのか？

…言いたい事は良くわかるけれど。

「はい。島に予定の日を申請していますから、変更は出来ないのです」

「そうなんですか？　じゃあ、嵐の日も？」

「はい、絶対に動かさません。嵐だって行きますよ、この舟で」

彼女は完全にひいている。多分、良かったなどと考えているのだろう。

それからの彼女は光る触手を覗いたり、触ろうとして僕に止められたり、時間を確認したりしながら時間を潰していた。今日の光る触手の収縮スピードは緩やかだから、そんなに心配しなくても大丈夫だろう。

…僕の船酔い体質。

やがて、少しずつではあるけれど霧が薄れてきた。それと同時に鮮やかな緑色の霧が視界に移る。

…何度見てもきれいなんだよな…この色。

「……………うわぁ……………」

この色に圧倒されない人間は、人間じゃないと思う。

鮮やかな木々の緑。

風に揺れ、葉のこすれる音。

心地の良い、空気。

この島には神が住んでいる。

「素敵…」

彼女も徐々に見えてくる景色に見とれているみたいだ。

…今のうち、ただだからなのだろう。

やがて完全に霧が晴れると、今度は島の大きさに圧倒される。島全体を覆うように生えている樹木がより大きく見せているのだとしても、巨大すぎる。

「…凄い」

無意識なのだろう、つぶやいたその声は圧倒されていることを表していた。

「あ、もうすぐです。船着場が見えてくるはずですよ」

一応声はかけたものの、絶対に聞こえていないと思う。
触手はゆっくりと進行方向を変え、島から離れていく。

「え、ええ？」

困惑した、彼女の声。

「な、何で離れて行っちゃうの！？」

「安心してください」

僕はゆっくりと話しかけた。

「あれは、幻影ですから」

「…幻影？」

「いかにも何かあるように見えるでしょう？ それを利用して、島を守っているんです」

「そう、なのですか？」

彼女は啞然とし、その後島についたときには呆然としていた。

「ほ、本当だ…しかも、船着場って結構…」

「ボロですからね」

年代物なんだよ気にするな、とでも言っただろうかと思った。

「では当初の予定通り、僕は明日の正午まですぐそこにある小屋で待っています。それまでに帰ってきてください。」

「時間を過ぎた場合には？」

「僕は帰りますので、どうぞご自由に。二度と帰ることが出来なくなりますから、よく考えた上で行動してください」

「…わかりました」

「それから、僕が貸したものは必ず身に着けておいたほうがいいか
と思います。例えば…ナップザックの手前のポケットにある時計と
か」

「時計？」

彼女は腕時計を出して、眺める。一応女物で、バンドも細めのも
のを用意しておいたから違和感はないはずだけれど。

「はい」

彼女は時計を左手首へ、内側に文字盤がくるように付けた。

「他に、ご質問は？」

「いえ、特には」

ないらしい。それなら、見送ることにしよう。

「それではさようなら。貴女に希望と絶望がありますように」

彼女が船着場を離れて行ってしまってから、まだそんなに経って
いないはずだ。僕は舟を固定してから小屋へ向かった。

長い間放置していたというのに、木でできた小屋は真新しい。

「ふう」

ここに来るのも久しぶりだ。
当然、あいつに会うのも。

『今回は遅かったのね?』

あいつは当然のことのように座っていた。

「ああ、かなり」

『待ちくたびれちゃった』

照れながらはにかむ。手で僕を呼んで隣に座らせ、僕はそれに従う。

『ねえ、いつ振り?』

「そうだな、3ヶ月くらい」

『…随分端的に言うのね? 私はずっと待っていたっていうのに』
「それは今に始まったことじゃないだろ?」

あいつは機嫌を損ねたらしく、ふいっと横を向いてしまった。
僕は仕方なく家の中に置いてあったはずの冷蔵庫を探す。確か、居間の棚の隣に…ああ、あった。

「何か、つくってやろうか?」

食い物で釣る作戦。

『……』

んゝ…。

冷蔵庫の中には、何故かサツマイモと砂糖、バター、卵、牛乳、

紅茶のパック。

「…わかった、スイートポテト作ってやるから。それから、後で1つだけわがまま聞いてやるから機嫌直してくれ」

あいつが振り返って、抱きついてくる。
ひどく、実感がない。

『やった!!』

嬉しそうになっこり笑う。まあ、こういうと大抵要求されることはただ1つきりなんだけれど。

それから僕は広言通りスイートポテトもどきを作ってやり、ついでに暖かいミルクティーも入れて、縁側で庭を見ながらゆっくりした時間を過ごした。

久しぶりの暖かい場所。
独りではない、場所。

『もう、暗くなっちゃったね』

「春といってもまだ寒いからな、仕方ない」

暗くなった縁側で、あいつは僕の肩に頭を乗せる。

『あと少ししか、いられないね』

「…決まりだからな、仕方ない」

『いつも、そればかり』

「…それもやっぱ仕方ないんだろうな」

彼女は俺の腕を抱きかかえた。

「ごめん」

それでも彼女の温もりが、俺に届くことはない。

こんなに、近いのに。

こんなに、触れているのに。

『仕方ないんだよ、気にしないで』

そう言って彼女は微笑んだ。

『それよりさっき、何でも一つ言うこと聞くって…言ったよね？』

意地悪そうな顔を向け、にこっと笑う。

―夜は、更けていった。

…目が覚めた。

『起きた？ 朝ごはん、作っておいたよ』

そう言って、エプロン姿のあいつがお玉を持って現れた。
まだ夢の中かと思って頭を床に思いっきりぶつけてみた。
痛い…夢じゃなかった。

『な、何やってるのよ!？』

あ、ちょっと額切った：

『寝ぼけているにしてはタチの悪い…』

呆れ顔で僕の所まで来て、さらっと手当てをした。額に包帯を巻かれた僕は、顔を洗って戻ってきた。

…卓袱台ちゃぶだいの上に、味噌汁と白米、鮭の塩焼き、納豆、卵焼きが置いてあった。

「僕、まだ目が覚めてないのかな？」

『いい加減、しつこいわね…』

どうやら、僕はかなり寝起きがいいようだ。

僕らは朝食を食べ終えた後、3ヵ月分の会話を交わした。

そして時間を見る。後、1時間。

「あと、一時間か…」

『…ん、そう、だね』

悲しそうな、寂しそうな、諦めたような、顔。

「まあ、またすぐ会えるよ」

ほんの気休め程度の言葉。

今は言うべきときではないというのに、つい口をついた。

それは僕自身を納得させるための言葉でもあった。

『…いつ？ 今度は、いつ会える？ 明日？ 明後日？ 1週間後？』

抑えていたんだろう、あいつは言葉を途切れさせることはなかった。

『何で私たち、会いたいときに会えないの？ なんて待たなくちゃいけないの！？ 寂しいよ！！』

いつもは言わない言葉。いつもは押し込めていた言葉。俺はただ抱きしめることしか出来なかった。酷く、現実感が伴わない。

『ごめん、辛いのは私じゃないのに』

「いいんだ、大丈夫。…ほら、早く戻ったほうが良い。力の消耗が激しいんだろ？」

『でも、』

「また会いに来る。…必ず」

『……わかった』

悲しそうに笑って頷いた。僕は家を出る。振り返ると、そこはただの小屋だった。

そして、約束の時間。

僕はもう1度だけ、船の上から振り返る。森の上で黒い光が広がった。

「…始まったのか…」

2・4月 【中旬】（後書き）

久しぶりに会ったけど。

やっぱりあいつが一番可愛いな。

…ん？急に暖かくなってけど。

なんなんだ、一体？

3・4月【私】

*

*

*

司と名乗る少年と別れてから、私はナップザックを捨てた。

中に入っていたのは初めに言っていた時計と、ライター、小柄な
バタフライナイフ、大きくて鞆に収まっているような：サバイバル
ナイフ、というものだろう。バタフライナイフの柄には、矢印が二
つ書いてあった。どちらも赤黒く、片方には『生』と書いてある。
そして、真っ赤なハンカチとシステム手帳、ボールペン。

「何なのかしら、これ。必要なの？」

何でいつも持っているものがここで必要なかわからない。

こんなに少ない持ち物を大きなバックに入れていることがバカら
しくなって、ライターとナイフ2本だけを出す。

そう、捨てたのではなくて目印にするの。

自分に言い聞かせるように歩き出す。

時計を見る。制限時間は24時間。

この日のためにスニーカーを買っておいてよかった。土を歩いて
いる感覚に、新鮮な気持ちになる。

——こんなに心が弾むのはいつ以来かしら？

いつも社長にこき使われて気持ちが沈んでいた。だから、今日は
そんな私に対するご褒美なんだわ。神様から手紙が来るなんて、夢
にも思わなかった！

木の間を舗装されていない道が続いている。見上げるほど、上ま
でまっすぐに続いていて気が滅入るほどではあるけれど、1日で登
れないこともないだろうと思う。

——山育ちを甘く見ないことね。

私は、黙々と、ただ山道を登り続けた。不思議とどれだけ時間がかかってもし一向にお腹が減らない。

——朝、食べてきていないのに。

同じ風景を見ながらどれだけ登ったのだろう。しばらく登り続けると、道は唐突に平坦になり、2メートルくらい高さのある草がその道の先を隠していた。

道は2つに分かれている。

——右は薄暗いわね。左は：全くわからない。
どうしようと悩み、時計を見てみる。

14時ジャスト。

あれから3時間も登り続けていたなんて信じられない。それに、日も全く落ちていない。

そういえば太陽が同じところにある：

照らし続ける太陽は、変わらず真上に在った。

——この調子で進んでいけば、きっと。

歩き回ってみたけれど、何も見付からない。

噂で聞いたような洞窟の入り口も崖も、何一つなかった。

騙されたの？ でもそういえば、この島から帰ってきた人の話は一回も聞かなかった。

ここで時計を見してみる。

——あと半日しかない：

焦りが私を支配した。帰れなくなるのは本末転倒：でも、収穫な

しで帰るわけにはいかない。

必ず、願いを叶えるんだ。

私は仕方なく、バタフライナイフを開いて地面に軽く突き立てた。ぐらりと揺れたナイフの柄が、パタンと倒れる。

『生』の矢印が、私に向いて。

――：後ろに行けって事？

振り返ると、先ほどまで登ってきた道が、見えない。

正確に言うと、真っ暗で道かどうか分からない。

道だけ木々がよけているように、太陽が照り付けていたのに。

じっと見つめていると、暗い闇が、ゆらりと揺れた。

――う、動いた!？

得体の知れない恐怖が身体を駆け巡る。そんなものは居ないと思っ
ているけれど、身体は照りつける太陽の熱を感知せず、変わりに
ヒヤリとしたものを感じ続けていた。

――な、なに、おぼけ!？

実はというと、そういう類のものは大の苦手だった。父親がそう
いうものが見える人で、小さい頃から恐ろしい話を聞かされ続け、
それがトラウマで――

「：：そんなこと考えている場合じゃない!!」

自分に活を入れ、ナイフの刃が指したほう――前の道へと駆け出し
た。咄嗟にバタフライナイフを拾い上げ、ぱちんと閉じる。

振り返ることが出来なかった。得体の知れないものは、見ないほ
うがいい。

私は走り続けて、やがて大きな洞窟を前にして止まらざるを得な
かった。

大きな口を開けて獲物が入るのを待っている、怪物――

「……って、現実になんかことが起こるわけじゃないじゃない」

言葉に出さずには居られなかった。

けれど、ここが目的地であつたように思う。本当に、どうしてもな
のかわからないけれど。

同時に、言っではいけないと何かが叫んでいる。

「……このために、来たんだもの、行かなくちゃ」

ふと入り口を見ると懐中電灯が置いてある。恐る恐る近づいてス
イッチを入れると、何の問題もなく点いた。

もう1つ、こちらは蝋燭が立っていた。けれど私は懐中電灯を離
さなかった。

――これをもっていこう。

そうして私はもう1度時計を見る。

後、3時間。今から戻れば、帰れるかもしれないけど――
考えを振り払い、私は洞窟に入ってしまった。

どこまで進んだのか、どこが突き当たりなのかわからないほど、
中は真っ暗だった。足元は不自由で、時々躓いては転んでしまう。
膝は怪我だらけ、けれど痛みはなかった。

――確実に近づいている。

そういう気がしてならなかった。

時計を見ると11時を少し過ぎたあたり。もう今から帰っても間
に合わない――帰らなくてもいいか。

そうして進んでいくと、巨大な扉が現れた。

「う、わあ…」

1人ではとても開けられそうもない。けれど、よく見ると地面に岩で出来たパズルピースのようなものが落ちていた。扉を見るとはめる場所がある。

「これをはめればいいのね？」

誰かに確かめるようにつぶやく。そして早速取り掛かる。

少し経ってピースが全てはまると、扉の隙間から光がこぼれる。

数歩下がると、巨大な扉は自然に開いた。すさまじいまでの光の奔流。

黒い光に、包まれる。

——おかあさん…

——おとうさん…

——わたしのこと、いらなの？

『な…』

——あんだなんか生まれてこなければ良かった！

——いい加減にしない、何なの、！？

——もう、いいから消えてよ！！

『なに…』

——舞子、じゃまだからあっち行って
——へえ、君がまいこちゃんか
——新しいお父さんよ
——かわいいね、舞子。

『なに、これ!!』

——やだ・・・
——いやです!!
——なんで
——どうして…

どうしてわたしばかりこんなめに。

ドウシテワタシバツカリコンナメニ!

『やめて!!』

気がつくと、わたしは小さい身体になっていた。どうしてだか、わからない。

そうして仰向けに寝転んでいる。天井ではなく、新しいお父さんの顔がすぐ傍にある。

20年近く苦しみを味わった母の再婚相手。

どうしても、いいけれど。

何も感じない。

何も聞こえない。

ただ、何かが見えている。

醜い、顔。

わたしはふと、持っていたサバイバルナイフを取り出した。

わたしの願いは1つ、

この人が、消えること。

ナイフを腹に突き立てた。

けれど、ナイフには鞘があって、刺さらなかった。

何かわからない顔が、奇妙な形に歪んだ。

「ーやっ」

こわい。

顔が顔でなくなっていく

こわい！

どろりと溶けて、黒いものがわたしの顔にぺたりと落ちる。

こわい…怖い！

どろどろ溶けたものが、わたしの身体に落ちていく。

こわい怖い怖い…

そうしてわたしの皮膚から、内部へと侵入していく。

こわい怖い怖いコワイ！！

身体は痺れたように動かなく、冷たいものが這いずりまわる感覚。

こわい怖い怖いコワイこわい怖い怖いコワイ…

目の前で溶けていくモノの外側だけでなく内側も溶け出した。溶けてわたしの中に入り込む。

こわい怖い怖いコワイこわい怖い怖いコワイこわい怖い怖いコワイ！

全てが見えなくなっても、わたしの中は気持ち悪い。

『それで、気が済んだかい？』

それは、変な感覚だった。

動かせるようになったわたしの腕を見ると、どろりと溶け出していた。肌の色をして落ちていく、何か。

「あれ？」

どろどろ溶けていって、血管が、神経が、筋肉が、骨が、見えた。「どうしたんだろ、これ？」

どろどろ、わたしの右腕が消えた。

「あはは、へんなの」

左腕も、同時に消えた。

「なくなってくよ？」

急に落ちて、お尻を打ち付けてしまった。

「いたた」

みると、膝から下も消えていた。

「地面にくっついちゃったみたいだな」

わたしだったものが、広がる。

「あゝあ、お腹もきえちゃった」

ふと見ると、分かれ道で見たあの黒いものが、じっと見ていた。

「どうしたの？」

黒いものは、ただじっと見ている。

「ひとりでさびしいの？」

ゆら、と、ゆれた。

「おいで」

ついに口元も溶けてしまって、最後の言葉は口に出来なかった。

――いっしょに行こう？

ぼとりとしずくが、おちたきがした。

真っ暗な世界で、誰かが居た。

それは、私。

闇の中全てが、私。

わたしを抱きしめてくれたはずの、最初の人。

忘れていた、私。

わたしは1人じゃなかった。

真っ黒な光が、わたしを包んでくれた。

『ヤットテニイレタ：ワタシダケノ、ワタシ』

舞子の場合」了

「青原

3・4月 【私】（後書き）

お読み下さり、ありがとうございました。

いかがでしたでしょうか？

ご意見・感想などありましたらご連絡ください。

ホラーの風上にも置けない…と感じられた方もいらっしゃるかと思います…

ご容赦ください（汗）

実は、この小説は5月・6月…と続いております。

連載も考えましたが、切りよく始まりだけということもあり、完結とさせていただきました。

機会があれば再度連載もあるかもしれませんが…（可能性としては薄いですが…）

そのときは、お読みいただければ幸いです。

それでは、またどこかで。

―天とぶ羽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0610d/>

不死の島

2010年10月17日04時30分発行